

枕草子まくらのそうし

清少納言せいしょうなごん

奈良時代	
710	平城京遷都 <small>せんと</small>
712	『古事記』
720	『日本書紀』
759	『万葉集』最後の歌
平安時代	
794	平安京遷都
9c 後半～10c 初め	『竹取物語』
905	『古今和歌集』 <small>こきん</small>
1000 頃	『枕草子』
1008 頃	『源氏物語』
12c	『今昔物語集』 <small>こんじゃく</small>
1185	平家滅亡 <small>めつぼう</small>
鎌倉時代 <small>かまくら</small>	
1205	『新古今和歌集』

枕草子

平安時代の中頃に、一条天皇いちじょうてんのうの中宮定子ちゅうぐうていしに仕えた清少納言によって書かれた随筆ずいひつ。宮廷きやうていでの生活、季節ごとの風物ふうぶつについての思いや人生についての考えなどが、三百ほどの章段あきだまに描えがかれている。

枕草子 参考資料

『枕草子』の別の段で、清少納言はほととぎすを絶賛しています。これほど愛好するほととぎすを、なぜ『春はあけぼの』の夏の趣おもむきに入れなかったのか、謎があります。

鳥は

郭公ほととぎすは、なほさらに言ふべき方かたなし。いつしかしたり顔がほにも聞こえたるに、卯の花うの花、花橘はなたちはななどに宿りをしてはたかくれたるも、ねたげなる心こころばへなり。

ほととぎすは、なんといっても全く言い表すべき方法がないほどすばらしい。いつの間にか、得意そうに鳴いているのが聞こえてくるのに、卯の花や、花橘などに宿って、姿のほうは奥ゆかしくそのかげにちょっと隠かくれているのも、悔くやしいほどすばらしい気立きだてである。

*したり顔 得意そうな顔。

*卯の花、花橘 ほととぎすが好んで宿る。

*はたかくれる 半分隠れる。

*心ばへ 心の性質。気だて。

五月雨の短き夜に寢覚めをして、いかで人よりさきに聞かむ
と待たれて、夜深くうち出でたる声の、^{*}らうらうじう愛敬^{あいぎやう}づ
きたる、いみじう心あくがれ、せむ方^{かた}なし。六月になりぬれば、
音もせずなりぬる、すべて言ふもおろかなり。
(第三九段)

五月雨の頃の短い夜に目を覚まして、どうにかして他の人よりも前に聞こう
と待っている、夜がまだ深い頃に鳴きだしたその声は、気がきいて、愛敬の
ある感じがして、心がさまよい出るほぐすばらしく、ぐうじようもない。六月
になってしまつと、全く音もしなくなつてしまつのは、一通りには表現できな
いほぐしものである。

^{*}あつあつして 老^こ巧^{こう}な性質。ほととぎすの鳴き声^{ななきこゑ}を言^いつ。
^{*}あくがる 心^{こゝろ}が奪^{うば}られること。